

# 育児期女性のキャリア選択の希望と自尊感情との関連

飯田麻衣子・園田菜摘

## Relationship Between Career Ambitions and Self-esteem of Women Raising Children

Maiko IIDA, Natsumi SONODA

### 問題と目的

日本の女性の労働力率は、一般に学校卒業後の年代で上昇し、その後、結婚・出産期に一旦低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇するM字カーブを描く(総務省統計局, 2018)といわれているが、近年では25~44歳の女性の就業率の上昇が著しく、M字カーブは以前に比べて浅くなってきている(内閣府男女共同参画局, 2020)。しかし労働力の増加が目立つのは正規雇用より非正規雇用であることや、正規雇用で就職した女性も出産や育児との関係から離職することが多いなどの課題が依然として残っている(参議院事務局企画調整室, 2019)。女性は、自分だけではライフコースを決めにくい(小泉, 1998)ため、様々な要因が影響することでキャリア選択が希望通りの人とそうでない人が混在していると考えられる。

キャリアは、職業経験を通して、職業能力を蓄積していく過程を指す概念(厚生労働省職業能力開発局, 2002)であるだけでなく、家庭生活、個人活動の積み重ねでもあり、就労形態の継続や変更もキャリア選択の一つである(飯田・園田, 2020)ととらえられている。育児期女性のキャリア選択を扱った研究では、キャリア選択が希望通りであれば育児負担感(富田・二宮, 2014)、生き方不満感が低いこと(松浦, 2015)、「子育てをしながらも、自分自身の生活を充実させたい」という理想と現実のギャップが大きいと育児不安につながりやすいこと(小野田, 2013)が指摘されている。このように、キャリア選択が希望通りであれば育児を

含む生活上の意識に良い影響をもたらす可能性があるにも関わらず、子どもを持つ女性のキャリア選択の希望についての研究はまだ数が少なく、どのような要因が女性のキャリア選択の希望に影響を与えるのかはわかっていない。

一方、学生を対象としたキャリア選択研究では自己効力感との関連が多く取り上げられており、自己効力感の高さは職業選択行動への自信(花井・清水, 2014)、職業適性不安(西山, 2003)と関連し、女子大学生が将来、家庭と仕事の両立を選択するためには高い自己効力感が必要であること(太田ほか, 2019)、女子短期大学生がやりたい職業を決定する際に自尊感情が関連すること(大久保, 2004)、が指摘されている。このように、キャリア選択と自己効力感、自尊感情といった肯定的な自己意識が関連する理由として、自尊感情は自己の価値や能力に関する自己評価であり(川西, 1995)、対人関係維持がどの程度うまくいっているかを示す主観的指標であること(Leary, Tambor, Terdal & Downs, 1995)、高い自尊感情は自分の決定に自信を持てることにつながること(Brockner & Elkind, 1985)が挙げられる。このため、女性が妊娠・出産といったキャリア選択の大きな転機を迎える際や、子育てがひと段落して再びキャリアについて考える際にも、自尊感情のような肯定的な自己意識が希望の持ち方に影響を与える可能性が考えられる。

女性の妊娠・出産時と子育てがひと段落した頃の2時点のキャリア選択の希望について扱った先行研究では、妊娠・出産時に「仕事の職種や労働時間の変更」、「退職」といったキャリア変更を希望していたパート

タイムの女性の場合、自尊感情が高い人の方が低い人よりも育児期の育児不安が少ないこと（飯田・園田, 2017）、フルタイムの女性だと自尊感情が低い場合に、専業主婦の女性だと自尊感情が高い場合に、それぞれ将来のキャリア選択の希望が叶うと予測している人の方がそうではない人よりも育児期のQOLが高いこと（飯田・園田, 2020）が示されている。このように、妊娠・出産時と将来のキャリア選択の希望の内容や実現度は、自尊感情との組み合わせにより、育児中の女性の育児意識やQOLに関連することが明らかになっているが、そもそもキャリア選択の希望の持ち方そのものに自尊感情がどのように影響しているのかは検討されていない。しかし、例えば女性が育児の大部分を担うことが当たり前であるという考えが強い日本社会において、フルタイムの女性が妊娠・出産後もキャリアを変更せずにフルタイムを継続することを希望し、かつその希望を実現させるためには、自分の生き方を自分で選び取るといった肯定的な自己意識が背景にある可能性が考えられる。また、例えば育児期に専業主婦やパートタイムだった女性が、子育てがひと段落する頃にフルタイムへとキャリアを新たに開拓したいと希望し、かつそれが実現できると予測するためには、育児期の自分とは異なる新たな挑戦を行うことを可能にする自分への自信が存在していると考えられる。このように、自分への肯定的感情である自尊感情は、育児期女性のキャリア選択の変更希望の持ち方や、その希望の実現に深く関連することが考えられる。

そこで本研究では、現代日本における女性のキャリア選択の希望の特徴を明らかにするために、キャリア選択の大きな転機が訪れる妊娠・出産時(過去)と子育てがひと段落する頃(将来)の2時点を取り上げ、それぞれの時点での変更希望の有無といったキャリア選択の希望内容と、その希望が叶うかどうかという希望実現を取り上げ、それが育児期女性の自尊感情とどのように関連するかを検討することを目的とする。またその際、フルタイム、パートタイム、専業主婦といった女性の就労形態によって、キャリア選択の希望の持

ち方が異なる可能性が考えられるため、育児期現在の就労形態を含め、検討していくこととする。

## 方法

### 1. 調査対象者

首都圏の私立保育園、認定こども園を併設する私立幼稚園に在籍する3歳から6歳の子どもを持つ育児期女性243人を対象とした。同じ園に在籍する子どもが複数いる場合は、より年長の子どもを女性の育児の対象とした。

### 2. 調査手続と調査内容

質問紙は2015年に東京近郊にある4つの私立保育園、1つの私立幼稚園に園を通じて配布・回収を行った。配布は453部、回収は304部(回収率67.1%)だった。本研究では、質問紙の中から、基本的属性、自尊感情、キャリア選択の希望内容、キャリア選択の希望実現への回答を分析対象とし、有効回答が得られた243人を対象とした(有効回答率79.9%)。

### 3. 分析対象の基本的属性

本研究の対象となった育児期女性の平均年齢は37.42歳(SD=4.51、範囲=24~50)で、就労形態はフルタイム37.9%、パートタイム21.4%、専業主婦40.7%だった。学歴は、中卒1.2%、高卒13.2%、専門・専修卒22.6%、短大卒20.9%、大卒38.7%、大学院卒2.5%、不明0.8%で、中卒から短大卒までを学歴の「低群」、大卒以上を学歴の「高群」とし、以降の分析に用いた。対象者の子どもの所属は保育園38.7%、幼稚園37.0%、認定こども園23.0%、不明1.2%、対象者の育児対象である子どもの月齢の平均は58.43カ月(SD=10.55、範囲36~76)、子ども数の平均は1.86人(SD=0.62、範囲1~4)だった。

### 4. キャリア選択の希望の測定

まず、育児期女性の過去のキャリア選択について、育児の対象である幼児を妊娠・出産した当時に、女

性がキャリア選択についてどのような希望を持っていたかについて、①「仕事を辞めず、産休・育休など（自営業やフリーランスなどの自主的な休暇も含む）を使って、同じ仕事を続けるつもりだった」（仕事継続・変更なし）、②「仕事を辞めず、産休・育休など（自営業やフリーランスなどの自主的な休暇も含む）を使い、職種や時間を変えて働き続けるつもりだった（例：フルタイム→パートタイム）」（仕事継続・変更あり）、③「仕事を辞めて、専業主婦になるつもりだった」（退職後専業主婦）、④「専業主婦

だったので、そのまま専業主婦を続けるつもりだった」（専業主婦継続）、⑤「専業主婦だったが、出産ののち、働き始めるつもりだった」（専業主婦後就業）、⑥「その他」の6項目から一つを選択させ、①④を「過去変更なし群」、②③⑤を「過去変更あり群」に分類した。⑥の「その他」は分析から除外した。また、出産1～3年後にその希望が叶った／叶わなかったのいずれかを選択させ、叶った場合を「過去実現群」、叶わなかった場合を「過去非実現群」に分類した（表1）。

表1. 過去のキャリア選択の希望内容と希望実現の比率

		フルタイム	パートタイム	専業主婦
過去の希望内容	①仕事継続・変更なし	73.9% (n=68)	23.1% (n=12)	9.1% (n=9)
	②仕事継続・変更あり	18.5% (n=17)	23.1% (n=12)	9.1% (n=9)
	③退職後専業主婦	4.3% (n=4)	23.1% (n=12)	44.4% (n=44)
	④専業主婦継続	1.1% (n=1)	13.5% (n=7)	27.3% (n=27)
	⑤専業主婦後就業	2.2% (n=2)	17.3% (n=9)	10.1% (n=10)
過去の希望実現	過去実現群	79.3% (n=73)	61.5% (n=32)	73.7% (n=73)
	過去非実現群	20.7% (n=19)	38.5% (n=20)	26.3% (n=26)

また、女性に子育てがひと段落しそうな時期を尋ねた上で、子育てがひと段落した将来のキャリア選択について、①「現在、仕事をしているが、将来も職種、働き方を変えずに働き続けている」（仕事継続・変更なし）、②「現在、仕事をしているが、将来は職種や働き方を変えて、働き続けている」（仕事継続・変更あり）、③「現在、仕事をしているが、将来は仕事を辞めて専業主婦になっている」（退職後専業主婦）、④「現在、専業主婦をしているが、将来も専業主婦をしている」（専業主婦継続）、⑤「現在、専業主婦をしているが、将来は仕事をしている」（専業主婦後就業）、⑥「その

他」の6項目から、もっとも理想的だと思うもの一つを選択させ、①④を「将来変更なし群」、②③⑤を「将来変更あり群」に分類した。⑥の「その他」は分析から除外した。さらに、理想的だと思うと回答したキャリア選択の内容が、実際に将来、子育てがひと段落する頃にどの程度実現していると思うかについて、「その通りになっていると思う(4点)」から「その通りになっていないと思う(1点)」の4件法で尋ね、3～4点を「将来実現群」、1～2点を「将来非実現群」に分類した（表2）。

表 2. 将来のキャリア選択の希望内容と希望実現の比率

		フルタイム	パートタイム	専業主婦
将来の希望内容	①仕事継続・変更なし	54.3% (n=50)	30.8%(n=16)	-
	②仕事継続・変更あり	44.6% (n=41)	65.4%(n=34)	-
	③退職後専業主婦	1.1% (n=1)	3.8%(n=2)	-
	④専業主婦継続	-	-	15.2%(n=15)
	⑤専業主婦後就業	-	-	84.8%(n=84)
将来の希望実現	将来実現群	89.1%(n=82)	75.0%(n=39)	77.8%(n=77)
	将来非実現群	10.9%(n=10)	25.0%(n=13)	22.2%(n=22)

## 5. 自尊感情の測定

育児期女性の自尊感情を測定するために、Rosenberg(1965)の尺度を山本ら (1982) が邦訳した「自尊感情尺度」の 10 項目を採用した。回答は「かなり当てはまる(4点)」から「全く当てはまらない(1点)」までの 4 件法として点数化した。主成分分析を行い、成分負荷量が.30 未満の 1 項目を分析から除外したところ、1 つの合成変数にまとまった。成分負荷量がマイナスの項目を逆転させた上で、9 項目を合計し「自尊感情得点」( $\alpha=.87$ )とした。

## 結果

### 1. 育児期女性の自尊感情の特徴

育児期女性の自尊感情の特徴を検討するために、フルタイム、パートタイム、専業主婦の就労形態ごとに基本的属性との関連を調べた。

まず、「自尊感情得点」と女性自身の年齢、幼児期の子どもを含めた子どもの合計数、幼児期の子どもの月齢との関連について相関分析を用いて検討したところ、どの就労形態においても有意な関連は示されなかった。また、学歴の「高群」と「低群」による「自尊感情得点」の違いを検討するために t 検定を行ったところ、専業主婦の女性においてのみ、学歴が「高群」の方が「低群」よりも「自尊感情得点」

が有意に高いことが示された ( $t=3.81, p<.001$ )。さらに、フルタイム、パートタイム、専業主婦の就労形態によって「自尊感情得点」に違いがあるのかを検討するために分散分析を行なったところ、有意差が示され ( $F=5.89, p<.05$ )、下位検定 (TukeyHSD 法) の結果、フルタイムの女性の方が専業主婦の女性よりも「自尊感情得点」が高いことが示された ( $p<.05$ )。

### 2. 自尊感情とキャリア選択の希望との関連

キャリア選択の希望内容と希望実現、就労形態による自尊感情の違いを検討するために、過去/将来それぞれのキャリア選択の希望において、希望内容の 2 群 (「変更なし群」「変更あり群」)、希望実現の 2 群 (「実現群」「非実現群」)、就労形態の 3 群 (「フルタイム」「パートタイム」「専業主婦」) による 3 要因分散分析を行った。以下に結果を過去のキャリア選択と将来のキャリア選択に分けて示す。

#### (1) 過去のキャリア選択の希望

過去のキャリア選択の希望内容、希望実現、就労形態による「自尊感情得点」の違いについて 3 要因分散分析を行った結果、有意な違いは示されなかった。

## (2) 将来のキャリア選択の希望

将来のキャリア選択の希望内容、希望実現、就労形態による「自尊感情得点」の違いについて3要因分散分析を行った。その結果、将来のキャリア選択の希望内容の主効果 ( $F=9.41, p<.01$ ) と、将来のキャリア選択の希望実現の主効果 ( $F=10.75, p<.01$ ) がそれぞれ示され、「自尊感情得点」は「将来変更なし群」の方が「将来変更あり群」よりも、「将来実現群」の方が「将来非実現群」よりも、それぞれ高いことが示された。

さらに、将来のキャリア選択の希望内容と希望実現の交互作用が示された ( $F=5.81, p<.05$ )。単純主効果検定の結果、希望内容が「将来変更あり群」の場合、「自尊感情得点」は希望実現の「将来実現群」の方が「将来非実現群」よりも高いことが示された ( $p<.001$ ) (図1)。

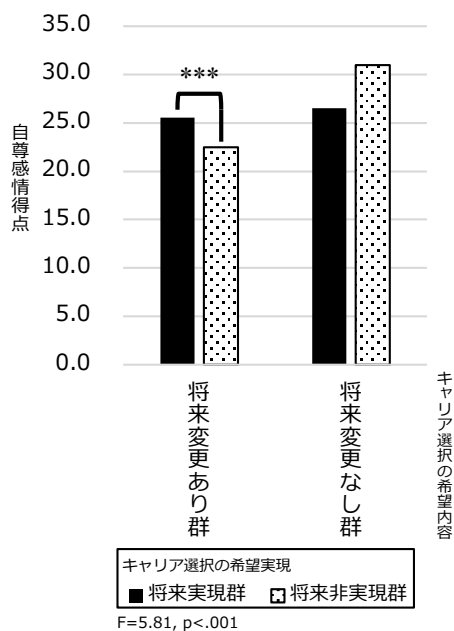


図1. 将来のキャリア選択の希望内容と希望実現の交互作用による自尊感情の違い

また、将来のキャリア選択の希望実現と就労形態の交互作用が示された ( $F=4.08, p<.05$ )。単純主効果検定の結果、就労形態が「フルタイム」の場合、「自尊感情得点」は希望実現の「将来実現群」の方

が「将来非実現群」よりも高いことが示された ( $p<.001$ ) (図2)。

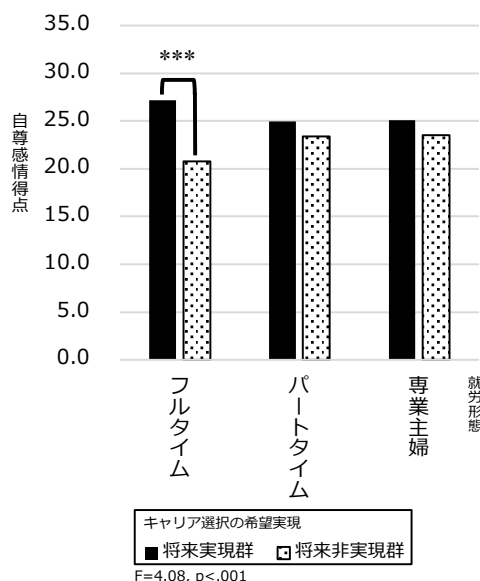


図2. 将来のキャリア選択の希望実現と就労形態の交互作用による自尊感情の違い

## 考 察

本研究では、育児期女性の妊娠・出産時(過去)と子育てがひと段落する頃(将来)のキャリア選択について、キャリアを変更するかどうかの希望内容と、その希望が叶うかどうかの希望実現が、自尊感情によってどのように規定されるのか、育児期現在の就労形態を含めて検討した。その結果、自尊感情の高さは、妊娠・出産時の過去のキャリア選択の希望には関連がなく、子育てがひと段落する将来のキャリア選択の希望内容、希望実現と関連する可能性が示された。

### 1. 育児期女性の自尊感情の特徴

まず、育児期女性の自尊感情の特徴について検討を行ったところ、女性自身の年齢、子どもの数、育児対象である幼児期の子どもの月齢との関連は示されなかった。自尊感情は自己評価の感情 (James, W.,

1892) であるため、年齢の高さ、子どもの数といった物理的要因に左右されるものではないと考えられる。

一方、学歴との関連については、専業主婦の女性の場合のみ、学歴が高い人の方が低い人よりも自尊感情が高かった。専業主婦は育児優先の生活となるので、仕事などの社会生活を通して周囲から評価される機会が少ないため、学歴の高さが育児期に自尊感情を保つ要因となりやすいのかもしれない。

さらに、本研究では就労形態による違いが示され、育児期の女性においてはフルタイムの人の方が専業主婦の人よりも自尊感情が高かった。この理由として、育児とフルタイムの仕事を両立できるという自信が女性の自尊感情を高める可能性があることと、その一方でそもそも自尊感情が高い女性がフルタイムという就労形態を選びやすい、という可能性も考えられるだろう。育児期女性を対象にした自尊感情の研究はほとんど行われていないため、この点に関する今後の検討が期待される。

## 2. 過去のキャリア選択の希望と自尊感情との関連

まず、妊娠・出産時のキャリア選択の希望について、キャリア選択の希望内容、希望実現による自尊感情の違いがあるか、就労形態を含めて検討した結果、有意な違いは示されなかった。このことから、たとえ自尊感情が高くても、妊娠・出産時のキャリア選択は必ずしも希望通りにできるわけではないことが示唆される。日本では、家庭での家事・育児分担率は妻が約8割で、夫は2割程度であり(国立社会保障・人口問題研究所, 2020)、未だに家事・育児の主担当は女性であることや、末子の妊娠判明時に仕事を辞める理由として「産前・産後休業や育児休業の制度がない」、「育児と両立できる働き方ができなそうだった(できなかった)」を挙げる人が多い(三菱UFJ リサーチ&コンサルティング, 2019) など、女性が育児の責任を大きく担わざるを得ない社会的な課題がある。妊娠・出産時には、育児をしながら仕事を続けるかどうかの選択を、女性の意思決定に

基づいて行う環境が日本ではまだ整っていないため、自尊感情の高さよりも社会的要因や家族との関係の方がキャリア選択に強く関連するのかもしれない。

## 3. 将来のキャリア選択の希望と自尊感情との関連

次に、将来のキャリア選択の希望について、希望内容、希望実現による自尊感情の違いがあるか、就労形態を含めて検討を行った。その結果、将来キャリアを変更することを希望する場合、自尊感情はその選択が実現すると考える女性の方が実現しないと考える女性よりも高いことが示された。育児期現在の就労形態を将来変更することは、就労形態、仕事内容、職種の変更等に伴う困難にぶつかる可能性が高まるため、自尊感情が高い女性の方が「自分が希望する就労形態への変更はきっと実現するだろう」と将来への楽観的な予測をしやすくなることが示唆される。本研究では、フルタイムの女性の4割以上、パートタイムの女性の6割以上が将来は働き方を変更して働き続けたいと希望し、専業主婦の女性は8割以上が新たに働き始めたいと希望していた。将来、育児中の現在とは違う働き方をすることや、無職から有職への変更を希望する場合、その希望が叶いそうだと期待するためには、自尊感情が重要な役割を果たすのかもしれない。本研究の結果から、高い自尊感情は育児期女性が将来、現在とは違う挑戦的なライフコースを描く際に、それを前向きに後押しする要因であると考えられる。

さらに、本研究ではフルタイムの女性において、自尊感情はキャリア選択の希望が将来実現しそうだと考える女性の方が実現しないと考える女性よりも高かった。現在、正規雇用されているフルタイムの女性は、働くことに対し、パートタイムや専業主婦の女性よりもシビアな面も含めて現実的にとらえていると推測される。本研究の9割以上の女性が将来は働きたいと希望しているなか、仕事に対し、より現実味を持っているフルタイムの女性だからこそ、高い自尊感情があることで、自身が希望するキャリアを将来掴み取れると考えることができるのだろう。

## 総合的考察

本研究では育児期女性の自尊感情が妊娠・出産時のキャリア選択の希望と、子育てがひと段落する将来のキャリア選択の希望にそれぞれどのように関連するかについて、就労形態を含めて検討した。その結果、自尊感情の高さは、将来、キャリアを育児期現在のものと変更することを希望する場合に、その希望が実現すると楽観的に予測することに関連する可能性があることを明らかにした。また、フルタイムの女性の場合、将来のキャリア選択の変更希望の有無とは関係なく、自尊感情はその希望が叶うと考えることに関連することが示唆された。将来のキャリア選択が希望通り実現すると予測する女性はそうでない女性よりも、育児期現在の日常生活の満足感が高いことが先行研究（飯田・園田, 2020）で示されていることから、その背景に自尊感情の高さが関連している可能性を示したことは、重要な意味があるだろう。一方で、本研究では自尊感情と妊娠・出産時のキャリア選択の希望との間に有意な関連を見出すことはできなかった。妊娠・出産時のキャリア選択の希望は、女性の心理的要因だけでなく、社会的要因や家族関係などが影響する可能性があるため、今後は自尊感情だけでなく、他の要因についても幅広く検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Brockner, J., & Elkind, M. 1985. Self-esteem and reactance : Further evidence of attitudinal and motivational consequences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 21, 346-361.
- 花井洋子・清水和秋. 2014. キャリア選択自己効力感尺度の構造とモデル—大学生と工業高校生を対象とした因子的不変性の検討—. *キャリア教育研究*. 33,1,29-38.
- 飯田麻衣子・園田菜摘. 2017. 育児期の母親の育児不安を規定する要因—自尊感情、キャリア選択の希望との関連—. *横浜国立大学大学院教育学研究科 教育デザイン研究* 8,157-164.
- 飯田麻衣子・園田菜摘. 2020. 育児期女性のキャリア選択の希望と QOL との関連. *日本家政学会誌*. 71,12,775-782.
- James, W. 1892. *Psychology, Briefer Course*. 今田寛 (訳). *心理学*. 岩波文庫. 1992
- 川西陽子. 1995. セルフ・エスティームと心理的ストレスの関係. *健康心理学研究* 8(1), 22-30.
- 小泉智恵. 1998. 職業生活と家庭生活“働く母親”と“働く父親”. *結婚・家族の心理学：家族の発達・個人の発達* 柏木恵子編. ミネルヴァ書房. 201.
- 国立社会保障・人口問題研究所. 2020. *2018年 社会保障・人口問題基本調査 第6回全国家庭動向調査報告書* No.38
- 厚生労働省職業能力開発局. 2002. 「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会」報告書
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. T., & Downs, D. L. 1995. Self-esteem as an Interpersonal monitor : The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- 松浦素子. 2015. 育児中の女性のキャリア選択と精神的健康との関連：復職の希望と実現の観点から. *お茶の水女子大学人文科学研究* 11,181-193.
- 三菱UFJ リサーチ&コンサルティング. 2019. *平成30年度 仕事と育児等の両立に関する実態把握のための調査研究事業報告書*
- 内閣府男女共同参画局. 2020. *男女共同参画白書 令和2年版*
- 西山薫. 2003. 就職不安とプロアクティブパーソナリティ特性および自己効力に関する研究. *人間福祉研究* 6, 137-148.
- 小野田奈穂. 2013. 育児期女性の「個人としての自分」と育児ストレスとの関連：理想と現実のギャップからの検討. *家族心理学研究* 27, 2, 123-136.
- 大久保純一郎. 2004. 女子短大学生の職業選択と自己同一性の獲得(2)—学生の職業的な自己同一性

- の状況と自尊感情・性役割感・家族構成の分析－  
帝塚山大学短期大学部紀要 41, 50-56.
- 太田さつき・久保田貴之・山田一之・高城佳那・漁  
田武雄・日隈美代子. 2019. 女子大学生のキャリア  
選択に関する一考察－キャリア教育への示唆－.  
環境と経営 25, 1, 161-179.
- 参議院事務局企画調整室. 2019. 経済のプリズム.  
No.181, 21
- 総務省統計局. 2018. 平成 29 年就業構造基本調査  
結果の概要
- 富田早苗・二宮一枝. 2014. 乳幼児期における母親  
の就労希望と育児負担感との関連. 小児保健研究  
73(2), 308-315.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子. 1982. 認知された  
自己の諸側面の構造. 教育心理学研究 30(1),  
64-68.